

# 人体解剖トレーニングセミナーの20年 —人体解剖実習による医療人教育への貢献—

杉 浦 康 夫

---

## <要 約>

名古屋大学医学部人体解剖トレーニングセミナーは20年間継続してきた。

この歴史は、医学教育における人体解剖学教育の位置づけの変化、教育環境の変化、さらには人体解剖学教育に対する社会的ニーズの変化などを物語っている。

セミナーを支えた力は、死後自分の体を献体し、人体解剖に提供しようとする不老会の人々の熱意と、暑い名古屋で人体解剖を勉強しようとする全国の解剖学教育者達の意欲である。

この力で今後も人体解剖トレーニングセミナーを充実させてゆきたい。

---

## 1. セミナー開始に至る社会的背景

医学部の学生が最初に体験する医学教育が人体解剖学であり、この人体解剖学実習はご遺体を用いて初めて成り立つものである。現在このためのご遺体は、篤志団体である不老会を中心とした献体団体から献体されている。かつて献体団体のない時代には人体解剖実習は病院、警察などから引き取ってくるご遺体により行われていた。全国に先駆けて作られた献体団体の不老会は、愛知用水を建設した故久野庄太郎氏と故勝沼精蔵学長、故山田和磨呂教授らにより1961年に設立された。発足当初300名ほどの会員が、1970年には2600人、1978年には6500人に達し現在会員番号17000を越すに至っている。不老会から、名大はじめ名古屋地区の主な医科、歯科系

大学は年間100名を越えるご遺体の提供をうけている。昭和40年代半ば、国立、私立の医科大学が新設され、医学生の数が増すとともにご遺体の数は不足するようになり、文部省の定めていた「医学教育では医学生二人に1体の人体解剖実習を行う。」という基準も現実には守り得ない状況になっていた。幸運にも名古屋大学は、従来からご遺体が多く保存されていたことと名古屋地区の中心的大学であるという条件に恵まれ、他大学に例をみないほどご遺体は潤沢に存在し、その保存と場所とに経費負担が追いついてゆけないほどであった。

当時の医科大学の新設は全国的に人体解剖実習のためのご遺体の不足ばかりでなく解剖学教育者の不足をも生み出した。解剖学教員の半数以上が他学部出身者で、これまで人体解剖の実習を受けたこともない人たちが解剖学の実習指導にあたらなければならない状態が発生してきた。この状態を切り抜けるために日本解剖学会のなかに二つの動きがあった。一つは解剖学教育を最小化する案（すなわち教育のminimum requirement）を作っていこうとする方向で、これは教える内容の最低限を明示し、少なくともそれだけは教員が解剖学教育の中で教えることができるようにしようというものであった。しかし解剖学会で議論はされたが、解剖学研究者、教育者の中で一致した見解はせず、まとまらないうちに、そのままになってしまった。それが30年近くたった今になって、医師養成上、臨床教育・臨床実習を重視すべきという医学教育改革の中で、臨床医学サイドから、コアカリキュラムとしてminimum requirementが提案されている。

もう一つの動きは解剖学教育の内容を縮小するのではなく、未経験、または未習熟な教育者を対象にした解剖のトレーニングを行うという方向であった。当時はどこも十分なご遺体のない状態のなか、学生の解剖学実習以外に解剖セミナーとしてご遺体を提供する余裕はなかった。それ故、解剖遺体を手に入れやすい海外で人体解剖学実習を行うなどの試みをした大学もあった。このような解剖実習は経費ばかりでなく、期間の長さから一般的ならず、内容も初心者から経験者まで幅広く対応したものはなかった。しかし、結果としては解剖学会全体としてこの2点に対する取り組みは行われなかった。

一方、解剖学会は、従来の解剖保存法の下に行われていた行路病死者、身元不明者を対象にした警察・病院依存の遺体収集から脱却し、篤志団体を中心とした献体による方向での人体解剖学実習の確立を目指した。解剖学会としてのこの取り組みは、約10年の歳月をかけて昭和53年11月「医学

および歯学の教育のための献体に関する法律」いわゆる献体法として成立した。これにより遺族の同意なくとも、献体を行う本人の意志表明がなされていれば、死後、人体解剖実習を行うことが許されることとなった。しかしこの法律によってすべての遺体収集の難事業が解決したわけではなく、その後も人体解剖実習のためのご遺体の不足を解消する努力は、そのまま個別大学、さらには個別の解剖学教室レベルでの対応に残された。

## 2. 人体解剖学トレーニングセミナーの出発と経過

このような背景の中名古屋大学では、1. 名古屋大学がご遺体と場所を提供し全国の解剖学教官（特に他学部出身者）の解剖学教育の研修を行えるようなセミナーを実施したいこと。2. 臨床の各科に呼びかけてご遺体を用いた研究あるいはフレッシュマンのトレーニングを行いたいこと。3. これらのことを実施するには学生用の解剖実習室だけでは、時間的制限を受けてできないので、その場所を作るとともに、ご遺体の収集業務を行う部門を設けることを概算要求案として出すこと。

この3項目を当時の医学部長飯島宗一先生にお願いして開始となった。残念ながら部門等の概算要求は20年後の今も日の目を見ていないが、人体解剖トレーニングセミナーについては確実に進むことができた。

このような人体解剖トレーニングセミナーの出発と動機が施設紹介パンフレット（1987年）に生き生きと述べられている。

「昭和61年4月学部内措置で開設された人体解剖教育施設は、解剖学教室、病理学教室および法医学教室の協力の下に現在、教育資料開発部門、研修部門、共同研究部門の3部門体制で活動が進められている。

本施設の構想は昭和50年以前から続けられてきた解剖収集センター設置要求にさかのぼる。本学部における学生実習用収集解剖体数は献体団体不老会の献身的な活動と、名古屋市や警察等関係当局の協力により全国でも最も多く、それにとまって解剖学教室員の負担も莫大なものであった。この問題を解決するために解剖体収集のための独立した組織を作る必要性が痛感されたのである。大学の施設として文部省に解剖体収集センター設立の概算要求をしたが、全国的には解剖体が著しく不足するという状況にあっては実現の見通しは薄かった。

昭和56年度に、当時の飯島医学部長、解剖学の酒井、佐野両教授らにより従来の構想を拡大した人体解剖教育センターを新設する案が生まれ

た。これは本学部が献体団体不老会から受けている恩恵を全国に分ちあえる道として、解剖教育のための実習研修機能を併せ持った施設を作ろうというものである。まずは全国の大学の解剖学教官を対象とし、人体解剖トレーニングセミナーを実施することとした。

人体解剖トレーニングセミナーは、本学解剖学教室の教官・技官全員の協力により、招待講師として東京医科歯科大学佐藤達夫教授（昭和56－60年）、弘前大学河西達夫教授（昭和61－62年）を招き、毎夏に10日から15日間、テーマを決めて系統解剖学の講義と実習にとりくんできた。全7回の参加者はのべ108名、それぞれの所属は全国の国公立合計30大学に上っている。

そして昭和58年度に基礎医学棟別館の1、2階1325m<sup>2</sup>を改修して実習室、セミナー室、その他の設備が整い、さらに昭和59年度には建物に隣接して解剖体の保存棟が新設された。

以上のような施設面の整備に加えて、医学部の教育研究体制改革のひとつの柱として、人体解剖の教育のあり方が歴代医学部長ほか関係する諸先生により求められ、考えられてきた。そこから生まれた構想にもとづいて、系統解剖のみならず臨床解剖、病理解剖を有機的に結びつけた広い意味での人体解剖教育法の研究、教育資料の開発、作製展示、さらには臨床との共同研究等に力を注ぐ目的で現在のような3部門からなる人体解剖教育施設が作られた。

概算要求の成立を待つまでもなく医学部改革のひとつとして人体解剖教育施設の実質的な活動ははじまっている。この上は名実ともに大学の施設として名大のみならず全国の解剖学の発展のために寄与することが期待されている。昭和62年12月」

当初から人体解剖トレーニングセミナーは全国の参加者が長期間のセミナー期間をとれないということを予想し、2－3週間程度を考えた。事実暑い名古屋で、当時クーラーもない状態で3週間の実習は、体力勝負というか、苛酷の一言につきた。季節の問題はともかくとして、学生実習でも40－50回の実習で行う内容を、この短期間にすべてを行うことは不可能であり、特定の部位を決めて実習を行うこととした。しかし実際にそのような実習を指導してくれる講師の選択はなかなか難しいものがあつた。当時新進気鋭の教授であつた東京医科歯科大学の佐藤達夫教授に無理矢理お願いした。それ以来第5回まで佐藤教授にやっていただいた。以後弘前大学

の河西達夫教授に6回から9回まで、金沢大学の田中重徳教授に10-13回を、新潟大学の熊木克治教授に14-15回をお願いした。

このように80年代-90年代の指導者は研究も教育も人体解剖学を主とする、きわめて専門性の高い人を選択しセミナーを行ってきた(資料1)。事実、1988年に行われた参加者へのアンケート調査によると、27名中23名が「肉眼解剖学のトップレベルの講師の先生に指導を受けることができるため」と答え、19名が「現在、人体解剖学実習指導をしているがその知識と技術を高めるため」と答えている。また約半数が「十分な時間をかけて、自分の納得いくまで解剖ができるため」と「解剖術式の新しい(別の)方法を修得するため」をあげている(資料2)。

しかし1996年には学内措置で作られていた解剖センターが廃止され、同時に予算的にも難しい状況が生まれてきた。その結果、外来講師を招待し実習指導を行ってもらうのではなく、実習指導は名古屋大学の教官、自らがを行い、外来講師に「神経系を中心に」、「臨床からみた解剖学」などの特別講義をしてもらうことになった。最近6回はこのような形で継続している。

期間についていえば初回は3週間を使ってセミナーを行ったが、3週間にわたる名古屋への滞在は指導者はもとより参加者の負担は大きく、翌年から2週間となった。以後1994年の14回まで2週間の日程で行われてきた。

90年代に入り、医師国家試験の繰り上げ、臨床医学実習の充実、医学教育でのカリキュラムの変更、特に医学教育の教養教育の中への前倒しなど大きな変更が行われた。その結果、学生の夏休みの期間が限られ、7月中旬まで授業が行われ、人体解剖トレーニングセミナーの期間が夏休みの1週間の日程しかとれない状況になった。

このような期間的条件に加え、従来人体解剖学実習を受けていないコメディカル(看護婦、理学療法士、整骨師)の人達の中で「解剖学教育に携わっているが、人体解剖学実習をしたことがないので参加したい」という人体解剖実習への要求が高まり、セミナー参加者の半数を超えるようになってきた。セミナー受講者の構成が大きく変化してきた(資料3)。この変化に従って、解剖実習内容に関しても、医学・歯学部で行う学生の人体解剖実習より一歩進んだ詳細な実習を求めるのではなく、初めて解剖を行う入門、初級の人体解剖学実習を求める声が強くなってきた。

実際、第14回人体解剖トレーニングセミナー(1994年)は人体解剖学入

門というサブタイトルを持って初心者へのトレーニングを行っている。それまでの13回が上肢、下肢、頸部、体壁、腹部内臓など身体各部を集中的に行ってきたのに対して、全体的な入門コースへと変化している。

これらの状況は、おそらくは医療系大学・短大などの非常に強い要望という、時代のニーズの反映であった。いくつかの医療系大学等ではコメディカルの学生に対して医学部の解剖実習の見学実習を含む、いろいろなレベルでの人体解剖学実習が行われるようになってきている。このような実習が進むにつれ、医療系大学等の解剖学担当教員が実習経験もなく指導できないと言う深刻な問題が新たに派生してきた。そのような事情がこのセミナーの参加者の変化、多様化を生み出してきた。

この医療従事者や医療系教員の中での解剖学教育への要求の高まりが、日本解剖学会におけるコメディカルのための人体解剖実習のカリキュラム化への運動となってきている。人体解剖トレーニングセミナーはその先鞭となるものである。そしてセミナー受講希望者は定員20人の2-3倍あり、今の体制では対応できず参加を遠慮してもらわなければならない状態も生まれている。

### 3. <トレーニングセミナー参加者の分布>

人体解剖トレーニングセミナーの参加者は資料4に示す。北は北海道、南は沖縄までの全国27国立大学、17公立大学、41私立大学、その他の専門学校、病院に属する教員が中心である。この多様な参加者に共通する問題は、自らの解剖学教育をどのように発展させるかということにあると思われる。27の国立大学ではほとんどが医学部の教官、大学院生である。公立私立大学参加者でも半数以上が医科系大学、看護大学などである。この参加者の所属はその他の32専門学校などの多様性とは際だって異なっている。年次推移を見ても参加者の半数は国立大学医学部に所属し解剖学教育に携わる立場にいる。これはいかに人体解剖学実習の経験が解剖学教育に必要なものであるかを物語っている。さらに参加者の出身学部別数を見ると、全参加者の4分の1が医学、歯学部出身者であり、人体解剖学実習を学生時代に受けた人でも、解剖学教育のためには再研修が必要であることを物語っている。

人体解剖学教育に対して常にある一つの批判意見がある。それは、神経や血管をひとつひとつ剖出し内臓に触れ、探るといった手間暇のかかる人

体解剖実習などではなく、模型やPCを駆使したバーチャルリアリティーを利用すればもっと効率よい教育ができるというものである。しかし、いかに人体解剖学実習が、手間暇かけてもそれらに代え難いものであるか、後に掲載する受講生の感想から読みとっていただきたい。ご遺体という実存在の語る力の大きさが、人体解剖の価値を決めているのである。

同時に、実習のご遺体は、献体されたものであり、献体者の生前からの医学、医療に対する身を以ての意思表示である。人体解剖実習は受講生や学生にとって、最初の医療実践であるといえよう。

医師・歯科医師にしか許されなかった人体解剖学実習であるが、時代のニーズとともに、医療職に就くコメディカルへの教育を深めるためにも必要であると変化してきた。これはよい医療を受けたいという社会の要求を反映したものとも言える。名古屋大学医学部人体解剖学セミナーは、これまでの20年の歴史を背負い、次の時代の要請も受け入れつつ、今後を着実に前進をして行きたい。

#### 4. 受講生の感想文・資料

実際の受講生の実態を知るため、いくつかの感想文から抜粋を掲載する。この20年のセミナーの歩みが読みとれよう。また、資料に中にも時代の流れを感じさせるものがある。

(1) 今回初めて学生の立場で解剖実習を行なって、これほど自分の精神や肉体に充実感をもたらしたのは15年間の解剖を通じて初めてです。最初実習のプログラムをみたとき、中身は充実しているがさほどハードスケジュールではないと思っておりました。しかし実習が始まって3日過ぎたころから今まで感じたことのないような疲労感に襲われました「この疲労感私は40才になって体力が低下し名古屋の暑さに耐えられないのか、それとも勉強不定による精神的な不安感からなのか」と自問自答しつつ明確な答を得られないまま朝9時から夜8時まで連日連夜の実習が続き、そしてとうとう最終日を迎えました。この日は実習終了後、終了証書の授与式があるということで午前中で実習を終了させ納棺と実習室の掃除をしました。終了式で今回の実習をお世話下さった先生方のご挨拶が終わり、終了証書の授与の時がきました。一人々名前が呼ばれ前へ出て田中重徳先生から手渡されました。いよいよ私の番になり名前が呼ばれ私は前へ出ました。

すると田中重徳先生は「ご苦勞様でしたね」と一言いわれ私に終了証書を渡してくださいました、その時今まで自問自答していた疑問が一気に解決したような気がしました。

日本医科大学 北 沢 命 (第11回参加)

(2) 教授から、「今年は頭頸部中心に行われるから、勉強してきなさい」と言われ、同僚の津野先生と共に暑い名古屋はPassしたいなと思いつつ、博多発“ひかり”に乗車し名古屋入りしたわけですが、鶴友会館のリツパな造りと周囲配置を把握するにしたい気持ちがだんだんPassからContinueへと？階段の下から“見玉さん〇〇したらだめ”と言われつつも？、名古屋も私達を歓迎してくれたのかどうかは知りませんが、徐々に名古屋の猛暑を肌を感じさせてくれました。今回の解剖トレーニングセミナー参加は大変有意義なものとなりました。講師の田中先生方のご指導および受講者の先生方とのアツイ交流、これらは普段考えていても簡単に実行できないことばかりで、2週間あっというまに過ぎてしまったような気がします。

9：00開始の17：00終了、その後の冷蔵庫を開ける楽しみ。これは本当に名古屋ならではやセミナーに参加してこそ味わえたものだと思います。またドボツと解剖に浸ることができ、肉眼解剖に対する視野・知識・私自身の勉強不足な所をより認識することができた最高の環境でした。是非とも再び夏の名古屋へ、どこまでやれるか解りませんが、この解剖セミナーで得た知識を、今後活かしていきたいと思います。

福岡歯科大学 見 玉 淳 (第11回参加)

(3) 学生時代に解剖学実習で、人体解剖の見学をする機会はありませんでしたが、実際に自分が解剖をさせていただいたのは今回が初めてでした。このような貴重な機会をいただいたことを心より深く感謝いたします。

昨年、初めて助手として学生と共に解剖学実習に参加したとき、自分の知識の曖昧さや聞かれてもわからないことばかりで、このままではいけないという思いがありました。しかし、日々の忙しさに解剖に関する勉強はつい後回しになっていたのが現状でした。

今回のセミナーに参加することで、臨床の場面でわかっていたつもりの解剖知識が実は違ったイメージにすり替わっていたということに改めて気づかされ、さらに人体の神秘さに直接ふれることができたことにとっても感

動しました。また、特別講義におきましてなかなか聞くことができないお話ばかりで大変興味深く聞かせていただきました。これらの経験を少しでも今後生かしていきたいと思っております。

また、今回のセミナーで同じグループになった先生方には大変お世話になりました。無事に一週間を乗り切れたのも同じグループの先生方、御指導して下さった先生方のおかげだと思っています。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さいました名古屋大学医学部解剖学教室の先生方、ご遺体を提供して下さいました故人とご遺族ならびに不老会の皆様方、及びセミナー開催に関わられた皆様に深く感謝いたします。

東京都立医療技術短期大学 堀川博代（第17回参加）

（4）この度は第21回人体解剖学トレーニングセミナーに参加させていただきましたありがとうございます。思い起こしてみれば、私が解剖学実習を行ったのは大学1年の前期でした。当時の私にとって解剖学実習とは、ただ教科書と同じ構造や形態を探すだけの単調なものでありました。幸いなことに札幌医科大学では毎年夏に臨床の先生や医療関係の学生を対象とした1週間の解剖学セミナーを開催しております。私も毎年参加し、日々の知識不足や臨床の先生方のご意見を聞くことで、知識の不足を補い、大変有意義な時を過ごしています。

今回、私が本セミナーに参加を希望したのは、この5年間行ってきた解剖学の知識を統合し、もう一度基本に忠実な解剖学を学習したかったからであります。しかし、本セミナーではその目的以上に充実した時間と、学習の機会を得ることができました。いつもならば、切断したり、あることも忘れてしまいがちな皮神経や皮静脈を温存し、これが一体何なのかを確認する作業は、解剖学実習の基礎を思い出させてくれるものであります。

前回の報告書の中で杉浦教授が「～この実習では手間、暇をかけて基本的解剖を行い、目的の構造に到達するのが遅くても着実にやることを強調し続けてきた。それが次のステップでの解剖実習、あるいは解剖の研究を支える一歩となるからである～」と書かれておりましたが、その意志がひしひしと伝わるような実習ができたことを心から喜んでおります。

普段味わうことの無い部屋の外と内との気温差にめまいを感じつつも、この1週間のセミナーは私にとっての宝となりました。

札幌医科大学大学院 菊 池 真（第21回参加）

（5）昔から法医学に興味を持ち、医学生用の教科書を独学したりするほど、なぜか解剖学に関心が深かった私。そしてこれもまたよくわからないのが、いつの間にか看護婦になっていたこと。看護婦として、臨床で働いたこともあります。どこかで進む道を間違えたのでしょうか。今回のセミナーを通して、間違っていないのだと気がつきました。確かに私は法医学者にはなっていませんが、看護婦という立場から解剖学を学んだり教えたりする講座に所属しています。今回のように、深く学ぶ機会にも恵まれました。

コメディカルがそれぞれの目的を持って実践してきたこのセミナー。それぞれの専門的知識を寄せ合い、教え合い、助け合いながら、ご遺体を通して学ばせていただくことは、失礼ながら医学部学部生の系統解剖より深いものだと感じました。臨床経験があったり、専門領域が違うことで、日頃話す機会の少ない医療従事者同士、いろんなことを教え合うことができたと思います。私はといえば、なぜか看護婦、であっても、褥瘡の有無や爪など、日常ケアと同じ部位をみてしまいました。また臓器の病変にも目を凝らし、お亡くなりになる前の状態を考察しました。そして大きな反省点もあります。筋肉、神経、骨、それぞれを覚えていても、神経支配や筋肉の起始部停止部などがわからない、という、単純な暗記しかできていなかった自分を痛感しました。実際にこの目で見た人間の体の中では、すべてが繋がっていましたのに。

こんな簡単なことを、貴重な経験をするまでしっかり認識できていなかった自分を叱咤し、これからの勉強につなげていきたいと思います。

最後になりましたが、たくさんの方を教えてくださいました故人のご冥福をお祈り申し上げるとともに御遺族の方々に心よりお礼を申し上げます。また、セミナーを開催し、ご指導くださいました先生方に、心から感謝致します。

兵庫県立看護大学 桐 村 智 子（第21回参加）

<資料1>人体解剖トレーニングセミナー（第1回～第21回）

回年	期 間	招待講師	対象部位（実習内容）	参加者数	使用ご遺体数
1	1981. 8.11 (月) - 8.28 (金)	佐藤達夫教授 (東医歯大)	頸部、上肢、背部	12名	6体
2	1982. 7.22 (木) - 8. 7 (土)	佐藤達夫教授 (東医歯大)	骨盤部、下肢	9名	5体
3	1984. 8.11 (木) - 8.27 (土)	佐藤達夫教授 (東医歯大)	胸・腹部（体壁を除く）	13名	7体
4	1984. 8.21 (月) - 8.29 (水)	佐藤達夫教授 (東医歯大)	頭頸部の内臓	21名	11体
5	1985. 7.25 (木) - 8.10 (土)	佐藤達夫教授 (東医歯大)	腹部・骨盤内臓	22名	11体
6	1986. 7.21 (月) - 8. 1 (金)	河西達夫教授 (弘前大)	上肢、体幹、腹部内臓	16名	8体
7	1987. 7.20 (月) - 7.31 (金)	河西達夫教授 (弘前大)	体壁、胸部・腹部内臓	15名	8体
8	1988. 7.25 (月) - 8. 5 (金)	河西達夫教授 (弘前大) 山下和雄教授 (日本医大)	A. 頭頸部を中心とした 局所解剖 B. 全身解剖の初級課程	19名	8体
9	1989. 7.17 (月) - 7.28 (金)	河西達夫教授 (弘前大) 山下和雄教授 (日本医大)	A. 腹部内臓・骨盤内 臓・および下肢 B. 全身解剖の初級課程	14名	7体
10	1990. 7.16 (月) - 7.28 (金)	田中重徳教授 (金沢大)	頸部・胸部・上肢の神経・ 血管筋と内臓（心臓等）	19名	10体
11	1991. 7.15 (月) - 7.26 (金)	田中重徳教授 (金沢大)	頭部・頸部および胸部内 臓（心臓・肺等）	29名	12体
12	1992. 7.20 (月) - 7.31 (金)	田中重徳教授 (金沢大)	腹部、骨盤部（下肢帯を 含む）	16名	5体
13	1993. 7.28 (水) - 8. 6 (金)	田中重徳教授 (金沢大)	頸部・胸・腹部（鯉弓神 経と心・血管系の発生の 観点からの観察）	17名	6体
14	1994. 7.25 (月) - 7.30 (土)	星野 洸教授 熊木克治教授 (新潟大)	人体解剖学入門	23名	9体
15	1995. 7.31 (月) - 8. 6 (土)	星野 洸教授 熊木克治教授 (新潟大)	人体解剖学入門	31名	11体
16	1996. 7.22 (月) - 7.27 (土)		人体解剖学入門－神経系 を中心に	29名	13体
17	1997. 7.28 (月) - 8. 2 (土)		人体解剖学入門臨床から みた解剖学	47名	13体
18	1998. 7.27 (月) - 8. 1 (土)		人体解剖学入門－発生学 の視点を加えて－	41名	15体
19	1999. 7.26 (月) - 7.31 (土)		人体解剖学入門	28名	10体
20	2000. 7.24 (月) - 7.29 (土)		人体解剖学入門	28名	8体
21	2001. 7.30 (月) - 8. 4 (土)		人体解剖学入門	27名	7体

## <資料2>参加者アンケート 回答集計（1988年8月実施より）

27人から回答が寄せられた（名大所属者を含まない）。

問0—5は選択された人数を〔 〕内に、問6以下は回答を原文のままのせた。

問0 0-1) セミナー参加年：

'81 [2]、'82 [3]、'83 [4]、'84 [10]、  
'85 [5]、'86 [8]、'87 [8]、'88 [9]

参加回数：

1回 [17]、2回 [2]、3回 [5]、4回 [2]、5回 [1]

0-2) 現在の所属

a・医学部 [17]、b・歯学部 [10]、c・その他 [0]

0-3) 出身（在学）学部

a・医学部 [6]、b・歯学部 [4]、c・その他 [17]

問1) 私共は前述のような趣旨で本セミナーを始めましたが、ご参加いただいたのはどの点に関心を持たれたためでしょうか。

- a. 現在、人体解剖学実習を指導しているが、その知識と技術を高めるため [19]
- b. 現在、人体解剖学実習を指導する立場にあるが、経験がきわめて不足しているため [9]
- c. 人体解剖学実習を直接には指導しないが、自分自身の解剖学の知識を深めるため [5]
- d. 人体解剖学を実際に学ぶ場がない（適当な指導者がいない）のでそれを学ぶため [2]
- e. 肉眼解剖学のトップレベルの講師の先生に指導を受けることが出来るため [23]
- f. 十分な時間をかけて、自分が納得いくまで解剖が出来るため [13]
- g. 解剖実習術式の新しい（別の）方法を修得するため [12]
- h. その回のテーマ（部位）をしっかりと解剖したいと考えて [7]
- i. 他大学の若い解剖学教育者との交流が出来る、知人が出来るため [11]
- j. 複数の先生から解剖学の講義を聞くことにより、広い視野から解剖学を見ることができるようになるため [15]
- k. その他：遺体の固定・保存状態を知りたかった（我が大学と比べて）

問2) 当セミナーを何で知りましたか、誰に勧められましたか。

- a. 過去に当セミナーに参加された方より [8]
- b. 大学、教室への案内 [11]
- c. 解剖学雑誌の案内欄 [2]
- d. 教授、主任 [9]
- e. 解剖学会での予告 [3]

問3) 今後のセミナーのあり方（講師についてなど）

- a. 引続き肉眼解剖学研究の第一人者の指導を受けたい。 [23]
- b. 同じ先生の指導で全身を数年がかりで。 [2]

- c. いろいろな先生の話を知りたいので、講師は一年毎に別の先生の方がよい。 [0]
- d. 初歩をていねいに教えてほしい。 [5]
- e. 自分のやり方で自分のペースでやりたい。 [2]
- f. その他:肉眼解剖教育の第一人者の指導を受けたい。退官教授でも良いのではありませんか。

問4) 財政上の問題

- a. 国・文部省にもっと働きかけるべきだ。 [20]
- b. 解剖学会にもっと働きかけるべきだ。 [12]
- c. 広く寄付を集める。 [3]
- d. 参加者がもっと負担する。 [2]
- e. 主催校で負担できないなら、セミナーが開催できなくなってもしかたない [0]
- f. 受講者の所属する大学・講座から援助してもらおう。 [7]
- g. セミナーを複数の大学の持ち回りでやることにより特定の大学の負担を軽くする。 [4]
- h. 整った名大の研究施設、超ベテラン講師、多数の受講者とこれまでの実績を踏まえ、国（文部省）に働きかけてもよいのではないかと考えております。

問5) 参加費用はどうされていますか。

- a. 自己負担 [13]    b. 一部自己負担 [10]    c. 自己負担無し [4]

問6) それぞれの立場（現在の所属）で本セミナーに対する感想と要望をお聞かせ下さい。

- 1. 医 解剖学の研究と教育に携わる者として常に厳しい修練が必要かと思えます。特に全身的・体系的知識を要求される肉眼解剖にあたっては、そういう場が必要と思われまふ。その点でこのセミナーは極めて意義深いと思えます。
- 2. 医 解剖実習で学生に混ってやれなかつた部分ができた。
- 3. 医 結果的にすごく勉強になった。
- 4. 医 セミナーで感じた熱気には驚きました。多くの人々が肉眼解剖に興味を持っておられることを知り安堵いたしました。これからもこのようなセミナーを開いて下さるよう希望します。
- 5. 医 我々のようなミクロの研究室にいる者には、解剖は自分で納得いくまで行うことができない。通常は教育に追われて学生の相手をするのが精一杯である。このような機会を利用して自分の技術を高めることはとても有意義である。
- 6. 医 セミナー開始初期の頃は初心者がほとんどいなくてレベルの高いセミナーであったが、少しずつレベルが下がり残念に思う。初心者は各大学で、ある程度のレベルに達するまで教育し、その後にはセミナーでレベルアップをするようにしないと、セミナーの意義が薄くなると思う。
- 7. 医 医学出身ではありませんので、このようなセミナーに参加することができたことは、非常に有意義でした。講師の両先生に教えていただいたこ

とは、貴重な財産として大切にに使わせていただきます。

8. 歯 本学のような実習時間が少なく、また適当な指導者のいない所では、このようなセミナーはこのうえもなくありがたいものです。特に、指導者が日本の肉眼解剖を代表するような方なのがありません。いろいろと問題があり、また、運営上のごくろうも並たいていものではないと思いますが、是非つづけていっていただきたいと思います。
9. 歯 歯学部にいると、どうしても（当然かもしれないが）頭頸部以外を軽視してしまう傾向があるので、頭頸部以外の各部位にテーマをきめて、勉強できるのは、我々にとっては、有意義なことだ。
10. 医 参加させていただき、肉眼解剖に対する自分の無知、無学をあらためて知らされた思いです。また、解剖学をどのようにして理解し、深めていくか、一つのきっかけができた感じを受けました。各大学の諸先生達と一緒に解剖し、真夜中まで酒を飲み、いろいろな話題で懇親を深めた日々は、解剖学を専攻するようになった自分にとって非常に感動的であり、これから解剖学を学び、指導していく上で、多くの布石を受けた思いです。この機会を利用して、再めて、セミナーの運営で数々のお世話を受けました名大スタッフ、諸先生に深く感謝する思いです。
11. 医 名大のみなさんの御努力には感激しました。
12. 歯 歯学部の解剖実習は時間が少なく、全身を詳細に観察する機会が無い為、本セミナーでの観察は大変有意義である。また、通常探することができないspecialistの先生方の講義が受けられる事が興味深い。さらに、全国の学校の人たちと知り合えるのも大変良い事だと思う。
13. 医 両先生の熱意のこもった一流の講義を拝聴できるという貴重な機会が得られたことに大変満足しています。実際の講義の内容は“学生を指導する”という目的以上のレベルにあるようですが、初心者でも少し背伸びをしながらついて行く方が得るものが多いような気がします。
14. 歯 テーマがしばってあり、そのため回を重ねると全身の解剖が身につくので大変良い。実習する時間も十分にあってよい。
15. 医 私は、解剖学教室に入った年にセミナーに参加いたしました。そのため、講義内容にやっとなついて行く感じでした。先生がラテン語で話されていても、和名でさえまだピンと来ないので少々無理がありました。しかし、私の場合、河西先生の比較解剖のお話には大変参考になりました。また、歯学部の先生の考え方や、見方、そして他大学のライへの状況など、とても参考になりました。他大の先生と共に解剖することによって、各大学の方法とかを勉強できました。
16. 歯 頭頸部のくわしい解剖を自分の手でできたことに満足している。成書で得た知識と人体実習との差異を考えるよい機会になった。
17. 歯 歯学部で組織学を担当する場合は、頭頸部の肉眼解剖の知識が重要ですから、また頭頸部をテーマとしたセミナーが開催していただけると幸いです。
18. 歯 本セミナーにおける講義の内容、先生方、それに参加の先生方は、みな素晴らしい方々でした。学生の私にとっては、ハイレベルで、先生方についてゆくの少しきつかったのですが、たいへんためになりました。その上、本セミナーを通じて多くの講師の先生方や参加の先生方の素晴らしい人格と教養に触れ、感動しました。学問を通じて、広く教養や人格が豊

かになった気がします。

19. 医 私は医学部出身者ではないために、セミナーに参加して始めて自分だけで勝手に解剖ができたことが大変良かったと思います。また、解剖を得意とする人の手さばきを見ることは良い勉強になりました。
20. 医 教室として、肉眼解剖学をその教育義務としているものの、教室の研究テーマは組織学的レベルで行われている場合、肉眼解剖の第一線の研究者から解剖学を学ぶことは、各臓器、器官の肉眼解剖学的問題点を認識し、統一的な認識を深める上でたいへんプラスになった。
21. 医 肉眼解剖学のトップレベルの講師の先生に指導を受けることが出来たのは、非常に魅力ある貴重な経験であり、身についたすばらしい財産であると思っております。
22. 歯 これまでの通り、4年1サイクルで進めていって良いと思う。・肉眼解剖の第一人者の講義を聴けること、又、所属大学の講義と違うものが聴ける点では、すばらしいと思うが、私のように組織学講座所属で肉眼解剖学の知識の不足している者にとってきつい面もあったし、パートナーの先生に御迷惑をおかけしたと思っている。・今年度のように、初級コースの並設も継続して頂きたいと思う。・さらに、初級コースなどは期間を1週間位の短期にして頂ければ、さらに参加しやすくなると思う（毎年2週間、自分の研究室をあげるのは非常にむずかしいので）。
24. 医 人体構造の三次元的な理解がさらに深められ、また肉眼解剖のトップレベルを知ることができ有意義だった。
25. 医 問1)でもあったように、他大学の先生の講義実習が受けられ大変参考になる。
27. 歯 解剖実習のやり方やレベルについて、自分よがりなところがなきにしもあらずで、実習のスタンダードを学ぼうえでも、本セミナーは大変にありがたい。

問7) 本セミナーをどの様に役立てておられますか、またはどのように役立つとお思いでしょうか。

1. 解剖実習の折に、時々実際にデモンストレーションをしながら名大セミナーの話をして学生にしている。そのなかから実際に興味を持って本セミナーに参加し、肉眼解剖を専攻した者もいる。
2. 解剖実習での学生の指導に役立つ。
3. 学生実習に還元することができた。
4. ①肉眼解剖実習のやり方など教育方法の改善。  
②第一人者の教育法・意見などを学び取り、教育に役立てたい。
6. 深い知識を持つことは解剖学教育に不可欠である。特に研究分野が片寄っている（ミクロの方へ）現在、マクロ教育を充実させる為には、マクロの専門家に、教育スタッフを再教育してもらうのは必要である。
7. 学生に対して解剖学実習の場で接するとき、役立っていると思います。できれば研究面でも役立てることができたら良いと思いますが（自分の能力の問題ですね）。
8. セミナーで学んだ知識や、新しい解剖法は、すぐに実習で使わせていただいている。したがって、学生の教育、自分の研究に直接役立っている。
9. 役立つ、役立たないは別にしても、実際に人体解剖の実習をする機会とい

うのは非常に限られているので、こういったセミナーが行われるのは必要なことだと思う。

10. ・教室でセミナーの内容を発表し、解剖実習指針で必要な所は、とり入れる様にした。  
・局所的解剖知識に関し、教室の知識と技術の向上に役立てた。
11. ・新しい術式を工夫するには便利な場でした。  
・多くの方の(手技上の)レベルが分かり、いろいろ考えさせられました。
12. 知識技術を深め、また実際に現物を観察することにより、本だけの知識だけでは無くなるので、多くの事柄を納得し理解できるため、講義の際に自信を持って話ができ、また実習においても同様である。さらに、本セミナー中に撮影した写真を講義に用いることにより、学生に対して、既成のスライドや本の複写した物を見せるよりも、説得力がある。また、このセミナーで知り合った先生方と文献、コンピューターソフト等のやり取りをしている。
13. 講師の先生方の解剖所見に対する独自の分析方法や理論を、学生実習や研究の場で紹介させてもらっています。
14. 本セミナーで学んだ解剖のやり方、技術、ポイントなどを次の年の解剖実習にとり入れて、そこを重点的にやる。学生を指導する上において非常に役立つ。
15. 他大学の独自の解剖手順などを紹介し、別の方法もあるという事を教えたり、また、他大(特に歯大)のライへの状況などを知る事ができ、非常に役立っております。
16. 講義・実習の指導に役立てたい。自分の研究にも生かしていきたい。
17. 人体解剖実習を指導される立掲にある方々には直接、知識一技術の充実に役立つと思いますが、組織学を担当している者にとっては、教養になると思います。
18. 学校の正課の授業は、どうしても時間的余裕に限界があり、私自身少なからず不満足でした。本セミナーで、じっくり時間をかけ、もう一度、知識を再確認でき、非常に有意義でした。
19. セミナーで集中的に解剖した所は今でも一番得意とする所となっていますし、解剖の手順を考えるには、役に立つと思います。
20. 上記(問1)のような認識を自己学習によって深めて行くために、成書やマクロの論文に常に目を通して居る事は、日常の研究活動と直接的には一致せず、学会発表を聴講するにしても、通常からの積み重ねが不足し、常に不満足感をいだいている。このような状況に対し、一線の研究者により、その理論の基礎と、歴史的な発展を時間をかけて聴講できる事は、どれだけ時間をかけても独習できないものが得られる。
21. セミナーで学んだことは、いろいろな意味で学生の実習指導(肉眼解剖)、さらには自分自身の研究へと役立て、発展させていこうと考えております。
22. 実際の肉眼解剖の講義・実習には携わっていないが、組織学を教える際のバックボーンと、人体の構造についての自らの知識と経験が増えたと思っているし、特に、私のような、医・歯学部以外出身で組織学講座所属のような経験の浅い者は、何年かに一度ずつでも出席していきたいと思っている。
23. いろいろな先生の解剖実習を経験することで、実習の意義が明瞭に成る様

です。特にマクロの第一人者の先生に実習を教わることは、非常に良い経験でした。

24. 組織学の講義、実習において、マクロの解剖と連続性を持って教育できるようになる。また人体の構造の統一的理解へ向かって一歩進んだような気持ちで、今後の解剖学教育の上で目にみえない所で役立つのではなかろうか。
25. 実際の学生実習に。
26. 十分な時間をかけて、自分の納得いくまで解剖できるため、学生の指導の時、非常に参考となる。
27. ・セミナーで学んだ解剖の見方や、解剖の方法を、大学の教育・実習に役立てたい。  
・セミナーで得た、研究上のヒントを具体的に展開したい。

問8) 各地から集まって来られる受講者の皆さんの間で研究・教育の交流を充実させたらよいとお考えですか（そのためのミーティング、発表会など）。

1. もし時間的に余裕があるならば大変結構なことと思います。
2. 参加者の負担が大きくなり、参加者の数の減少につながるような発表会は望ましくない。
3. 共通のthemeをもち、高めあうような交流があればよいと思う。
4. 寧ろ、本セミナー受講生O.B.が必要に応じて参加し、研究・教育上の問題点につき自由に討論する方がよいのではないか。セミナー参加中は解剖そのものを十分した方がよいと思います。
5. 多くの大学の若い教育者が集まるのだから、互いを知り情報を交換するためにも、半日くらいミーティングを行うのはよいことだと思う。
6. 一緒にセミナーを受ければ心が通い合うので今のままで良い。
7. セミナーの総時間数が少ない現状では、そのときの解剖テーマに専念することが重要であると思いますので、特に他のことは必要ないのではないのでしょうか。
8. このセミナーのよい所のひとつは、普段の雑用から開放され、解剖にどっぷりつかれるところにあると思います。したがって、あまり、いろいろせずに、従来どおり解剖にのみ専念できるほうがよいように思います。
9. 特に考えない。
10. ・大変に良いこととおもいます。  
・その内容が充実される様になれば、解剖学会における一つの宿題報告されるとよいと思います。
11. 必要に応じてoffの時間に交流していますので特に思いませんが、半日くらいは各自の専門のスライド発表くらいあってもいいのでは、と思いました。
12. 各学校により授業の行い方が異なっていると考えられるので、それらを自由に話し合えるような機会が有ると面白いと思う。
13. セミナー期間中に特に改まった会を設ける必要はないように思います。“合宿”中に講師の先生方も交えて受講生の間で“ざっくばらんに”そういった情報交換をする機会も多く、それが又、セミナーの魅力の一つにもなっているからです。
14. 初日の夕食会の時にでも歓談の程度で、研究の話をしたら良い。
16. 全員でなくとも、何人かの人に発表してもらうのもよいかもしれません。

17. 実習時間が短いので、テーマをきめたミーティングを行い、受講者の交流をはかることも必要だと思います。
18. 可能であればそうすれば良いと思いますが、各個人の経済性、時間の都合などをどのように調整するのが課題だと思います。また、学生の立場からは、どの程度のレベルにするのかも問題だと思われます。
19. 希望者があれば、発表会その他をやることには賛成ですが、それを強要することはさけるべきだと思います。
20. 基本的には、肉眼解剖の第一線の研究者のお話をうかがう場と考えているので、セミナーの受講者間での交流を、セミナーのプログラムの中に入れる必要はない。
22. これまでと同様に、学会毎に名古屋会のような集まりを開けばよいと思う。
24. 解剖実習の予習、復習をおこなうのが実習を有意義にするのに必須なので、研究発表等の交流は「できれば」という程度にとどめるのがよいと思う。
25. 良い。解剖学会の場を利用するのが良いのではないか。
27. 現在どのような会合もたれているのか知りませんが、解剖学会等の機会にぜひ交流会を望みます。もちろん、何らかの研究発表会ができればすばらしいと思います。

問9) 私達はセミナーをもっと発展させようと思っています。そのため改革すべき方法がありましたらお教え下さい。

1. 名大（主催校）の努力と御苦勞に感謝していますが、やはり1) 財政と2) 講師が大きな問題だと思います。少なくとも講師の先生への負担はないように出来ればと考えます。参加者からある程度の（講師謝金も含めた）受講料の徴収は現時点ではやむを得ないかも知れません。
2. もっとこうゆうセミナーがあることをPRすべき。  
金銭的な基盤がしっかりあれば良い。  
鶴友会館なみの宿泊場所がもっとあれば良い。
4. ビデオ装置などを使い、個々の遺体での解剖状況を見学できるようにしてはどうでしょうか。遺体によっては興味ある変異を同時に多数の参加者が見ることができると思います。
7. 特に思いつきません。現状で充分価値あるセミナーだと思います。できるだけ解剖に専念させて下さい。
9. 現在の方法でよいと思うが、夏の名古屋はあついと思う。
11. 今まで解剖“学”を教示するものというニュアンスが強かったように思います。集まってくる人の手技上のレベルを考え、また99%は肉眼解剖学専攻ではないことを考えれば、解剖の“やり方”（当然、実習書は最もmajorな寺田・藤田に準拠してトレーニングすべきだと思います）を徹底的にトレーニングする場にした方がいいように思います。学生実習で見るべき重要な（例えば、頭部など、学生実習のスピードの中で適切な示説を加えるには、数を解剖してトレーニングしなくては実力がつかないと思います。これは名古屋でないともうかしいです。）構造をいくつか選び、その構造を学生の見ている前で、早く正確に剖出して、適切な示説をする、そういう能力をみがく場にしたらいいかと存じます。例えば腹膜関係などは、適切に癒着を処理して示説しながら深部に進んでいく練習とか（多数の遺体を使って）。

12. 各教室への案内の徹底（学校によっては教室へ達しない事もあるそうなので、主任宛に出したらどうでしょうか）。セミナーにおいては、今回の様に2コースに分けて行うのも良いが、その場合でも今回の様に教室（実習室）が完全に分かれてしまうと交流が少なくなるので、コースは違っても実習室は同じほうが良いのではないのでしょうか。
  13. 財政上の問題等もありなかなか難しいこととは思いますが、これまでのまま ―ベテランの先生の講義と少人数の受講生による実習―だけのセミナーが理想的な形であると思います。
  14. 脳の解剖実習もテーマに加えてほしい。
  16. セミナー中に今回のようなシンポジウムを企画するのはよいと思いますが、内容の点で少し散漫になったように思います。テーマについてより具体的なものがいいかと思います。
  17. 開催校にあまりにも負担が大きいのので、参加者の負担が多少は多くなってもしかたないと思います。
  18. 1) 財政の問題、2) 講師の確保、3) 実施内容など、3つの点について問題提起がありました。これらのことを考慮にいきますと、毎年人数は20人前後、期間も2週間、その他いろいろありますが、現在の規模、内容でよいと思います。人数が増えても場所の確保や宿泊の手配（や鶴友会館）にも、また新たな問題が起きてくると思います。現在のセミナーの内容を末永く持続されることを願ってやみません。
  22. ・学会などで、セミナー中の様子など写真etc.でPRを中心とした報告・掲示などしてみたいかがでしょう。問6にも述べましたが、詳しく解剖して、まとまりをつかせるには最低2W必要かと思いますが、セミナーの長さという点で出席できない先生方も多数いらっしゃるのではと思います。
  23. 医学、パラメディカルの広い範囲を対象に開講していただけたらと思います。
  24. 財政上の問題を解剖学会にはたらしかけて解決するようにしなければ、将来の発展は望めないだろう。また名大解剖にあまり負担をかけないような（財政上また時間的にも）運営を考えるべきであろう。
  27. 時間に困難な点もあるかと思いますが、その日その日の課題について討論があるといいと思います。
- <その他>
7. 長い間ご指導いただきありがとうございました。セミナーの今後の御発展をお祈り申し上げます。
  8. ごくろうさまです。
  13. セミナーを開講し支え続けて下さる名大の先生方に厚く御礼申し上げます。

＜資料3＞人体解剖トレーニングセミナー（第1回～第21回）受講生内訳  
所属機関（大学・学部・その他）および出身学部・分野別

回	参加者数	所属機関別				所属学部別			出身学部別		
		国立 大学	公立 大学	私立 大学	その 他	医	歯	その 他	医	歯	その 他
1	12名	3	4	5	0	1	11	0	2	0	10
2	9	3	3	3	0	8	1	0	1	0	8
3	13	5	1	7	0	12	1	0	5	0	8
4	21	7	4	10	0	16	5	0	7	3	11
5	22	8	5	9	0	16	5	1	6	3	13
6	16	4	4	8	0	11	5	0	4	3	9
7	15	6	3	6	0	4	7	4	2	5	8
8	19	10	2	7	0	8	8	3	2	5	12
9	14	5	4	4	1	5	7	2	2	5	7
10	19	10	1	6	2	9	6	4	1	5	13
11	29	12	2	13	2	16	11	2	3	11	15
12	16	6	1	3	6	6	1	9	1	0	15
13	17	5	1	6	5	7	2	8	0	4	13
14	23	10	1	5	7	10	2	11	5	2	16
15	31	7	2	14	8	12	7	12	2	5	25
16	28	11	0	11	6	12	0	16	5	0	23
17	47	19	5	17	6	26	6	15	4	4	39
18	41	10	4	10	17	13	6	22	3	6	32
19	28	6	1	14	7	10	5	13	2	6	20
20	28	6	5	12	5	12	3	13	2	4	22
21	27	7	6	8	6	10	4	13	1	4	22
計	475	160	59	178	78	234	93	148	60	75	341

＜資料4＞人体解剖トレーニングセミナー（第1回～第21回）受講生所属  
機関

【国立大学】27校

北海道大（医）・秋田大（医短）・東北大（医）・筑波大（医学専門学群）・東京大（医）・東京医科歯科大（医／歯）・新潟大（医）・富山医薬大・山梨医大・信州大（医）・岐阜大（医）・名古屋大（医／環境医学研／分院／医短）三

重大(医)・京都大(理/工)・大阪大(医)・神戸大(医/医短)・岡山大(医/歯)・広島大(医/歯)・山口大(医)・香川医大・高知医大・徳島大(医/歯)・熊本大(医)・大分医大・長崎大(医)・鹿児島大(医/歯)・琉球大(医)

### 【公立大学】17校

札幌医大・福島医大・埼玉県立衛生短大・東京都立保健科学大(医療技術短大)・横浜市立大(医)・名古屋市立大(医/看護短大)・愛知県立看護大・和歌山医大・大阪市立大(医)・大阪府立看護大(医短)・広島県立保健福祉短大・九州歯大・大分県立看護大・静岡県立大・茨城県立医療大・兵庫県立看護大・九州看護福祉大

### 【私立大学】41校

北海道医療大(歯)・岩手医大(歯)・東北文化学園大(医療福祉)・日本歯大(歯/新潟歯)・埼玉医大・自治医大・日本大(歯/松戸歯)・独協医大・聖マリアンナ医大・順天堂大(医)・杏林大(医)・日本医大・昭和(大/歯)・東京歯大・帝京大(医)・東京医大・東邦大(医)・北里大(医/衛生)・神奈川歯大・鶴見大(歯)・東海大(医)・金沢医大・岐阜医療技術短大・藤田保健衛生大(医/短)・愛知医大(看護)・関西医大・大阪医大・大阪歯大・吉備国際大(保健)・福岡大(医)・福岡歯大・明治鍼灸大・川崎医大・久留米大(医)・聖隷学園浜松衛生短大・川崎医療福祉大・川崎医療短大・三育学院短大・愛知学院大(歯)・銀杏学園短大・神戸学院女子短大

### 【その他】32校

国立東名古屋病院附属リハビリ学院・国際鍼灸専門学校・県立千葉盲学校・県立浜松盲学校・中部リハビリ専門学校・米田柔整専門学校・那覇看護専門学校・川崎リハビリ学院・日本福祉大学高浜専門学校・西日本リハビリ学院・熊本リハビリ学院・愛知医療学院・西神看護専門学校・すこやか鍼灸院・千船病院・小山整形外科病院・西日本病院(総合リハビリ部)・済生会中津病院・三木市民病院(総合リハビリ部)・大阪府立住吉病院・宇部温泉病院・協和会病院・佐田病院(リハビリ科)・川島整形外科病院(リハビリ科)・新藤矯正歯科クリニック・平成整骨院・名古屋市科学館・総合健康推進財団九州事務局・日本工学院専門学校・山口コメディカル学院・東海医療工学専門学校・大阪柔整会附属柔整学院

合計117機関

### <資料5>セミナー実施に携わった名古屋大学関係者(五十音順)

白 倉 治 郎	酒 井 恒	竹 内 義 喜
鬼 頭 純 三	阪 中 雅 広	星 野 洸
小 林 邦 彦	佐 野 昌 雄	山 下 和 雄
小 林 繁	杉 浦 康 夫	若 林 隆
小 林 身 哉	千 田 隆 夫	